

グループ学習プロジェクト

(2006年～2019年)

片本 宏茂 (市内ブロック)

1. 問題意識

「異質協同のグループ学習」に魅力を感じて実践を重ねてきた。実践で探ってきたのは「主体者形成のグループ学習をどのように創り上げるか」である。グループ学習でうまくなることで何が育っているのか。うまくすることだけではない「+α」のところを実践の中から見つけていこうと考えた。

2. 方法

1年のうち前半を文献研究にあて、後半はメンバー全員が一年に一本の実践報告・分析を行う。

実践づくりで重視したのは「実践のねらい」「教える中身」を明確にすること。「経過」「結果」を具体的事実として示すこと（感想文の一覧表づくり）。実践でわかることを明らかにすること（考察）。分析では「技術について」と「グループ学習について」という視点で討議を行った。

3. 研究でわかってきたこと

①実践づくりで大切なこととして、①教える中身がはっきりしていること②自主的自発的な学習を引き出すための教師の指導③トラブルの原因を技術的な内容と結ぶこと、であることがわかってきた。

②「技術」は「何をどう切り取って子どもたちに見させるのか」という問題意識に立って実践する。観察ポイント＝教え合う中身と捉えること。うまくする・うまくするためには技術ポイントを明確に理解しなければならない。そして、それを言語化して友だちに伝えなければ教え合いは生まれない。（「技術認識」を子どもにわかりやすい表現に置き換えて、教え合いの核となる観察ポイントにする）

③グループの中で何が起きているのかを探る「MRI」：子どもの感想文を一覧表にする作業をしていく中で、実践者がねらいとする視点を決めて表にしていく（MRIと命名した）。着目した子どもの様子や、周りの子どもたちや教師の関わりなどが見えてくる。そして個や集団の質が高まる節目や、原因や要因を考察していく。

④集団の質が変わるときを見つける

「+α」は「集団の質の高まり」に関わるものがある。そして、その高まりは「自治的な学習集団」の形成に向かっている。「ある子のつまずきについて全員が記述し始めた」「練習課題を共有している」「つまずきやトラブルを技術課題の視点で書いている」など、「質の変化」の芽が出始める。

⑤学習集団の質の違い

各グループは個別の発展をする。それを比べることで「質の違い」を知ることができた。

「できるリーダー中心」や「わかる先行のリーダー」「みんなで考え合っている」グループなど。比べることで「集団の質」が発展していく道筋がわかってくる。

⑥「自治的な学習集団」づくりをめざして教師は「学びの原動力として価値があるもの（意味のある発言やうまくなる手立てとしての価値ある感想）」にスポットライトを当てていく。それは①もめごとの中にある②みんながその声に気づけないことを広げる③わからない子が何につまずいているのか、わかる子が気づくようにしていく。そして、徐々に自分たちで価値を見だし、光を当て合う集団へと発展していく。

⑦「+α」は「民主的感覚」

「みんながうまくなる」をめざしていくとき、取り巻く現状に対して「これはおかしい」と気づく感覚（「民主的感覚」）が育つ。「みんながうまくなること」は「民主的な社会制作づくり」である。

⑧「異質協同のグループ学習」実践をいかなる視点で分析していけばいいか。まだまだ霧が晴れない。